

---

# 奇跡の果てにあるものは

時満

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇跡の果てにあるものは

### 【Nコード】

N4875N

### 【作者名】

時満

### 【あらすじ】

今まで書き溜めた詩を思い切って少しずつ公開してみることになりました。

連作ではないので、統一感はありません。

何か少しでも、あなたの心を揺らす言葉があったなら、これ程嬉しいことはありません。

## 奇跡の果てにあるものは

地球カレンダーを知っていますか？

地球が産声を上げてから、今現在までを一年に置き換えたカレンダーです。

二月の下旬、まだまだ寒さの厳しいある日、初めての命が生まれました。

それから半年ばかり、命は微睡んでいました。

九月の下旬、残暑厳しいある日、初めて多細胞生物が生まれました。でもまだまだ命は微睡みの中。

十一月も下旬に入る頃、冬の気配の濃くなるある日、突然命は目覚めます。

魚が生まれ、

両生類が生まれ、

森が生まれ、

爬虫類が生まれ、

恐竜が生まれ、

ほ乳類が生まれ、

鳥類が生まれ、

どんどん地球は賑やかになりました。

クリスマスには恐竜が全盛期で、大地を踏みしめていました。でも、クリスマス翌日には恐竜は絶滅してしまいます。

ところで人間は何時生まれたのでしょうか？

大晦日です。

十二月三十一日、二十三時三十七分、  
ホモ・サピエンスは産声を上げました。

二十三時五十九分四十六秒、  
キリストが生まれ、

二十三時五十九分五十九秒、  
たった一秒の間に二十世紀が始まって終わり、更に二十一世紀が始まりました。

四六億年という永遠にも思える時間の中で、  
私達は白昼夢よりも儂い一瞬を生きています。  
その一瞬に永遠の刹那を生きています。

それが奇跡でなくて、何なのでしょう？

その奇跡の果てに、  
たった今、  
君は産声を上げました。

新しい年の始まりです。

それは君に託された、  
未来なのです。

## あなたと私

私はあなたに挨拶をします

あなたが私に挨拶をしたから

それで私の心が開きました

私はあなたの名前を呼びます

あなたが私の名前を呼んだから

それで私はあなたの存在を知りました

私はあなたの手を握ります

あなたが私の手を握ったから

それで私は温もりを知りました

私はあなたの頭を撫でます

あなたが私の頭を撫でたから

それで私は幸せを知りました

私は傷付いたあなたを抱き締めます

あなたが傷付いた私を抱き締めたから

それで私は孤独を知りました

私はあなたに口付けしました

あなたが私に口付けしたから

それで私は幸せは苦しいこともあると知りました

全部あなたが教えてくれた事です

私の中にはあなたが溢れています

苦しいくらいにあなたで一杯です

ではあなたの中は誰で一杯なのでしょう  
その疑問で私は嫉妬を知りました

もしあなたを失ったら私の胸は空っぽになるのでしょうか  
その想像で私は恐怖を知りました

けれども

私はあなたが教えてくれた事は  
何一つ手放さないでしょう

どれが欠けても

私は私ではなくなってしまうので  
全部抱えたまま

あなたに私を渡しました

あなたは私を受け取って

私はあなたを受け取りました  
それで私は愛を知りました

## 乙女の散歩道

白い日傘に

青い服

赤い靴で軽やかに

タタタタララン  
タラランラン

歌は賛美歌

手に詩集

心にビイドロきらきらと

ラリラランラン  
リリラリ

白い丘越え

青い川越え

赤いお屋根の教会へ

ディンドンディンドン  
ディンドン

空に響くは鐘の音

地に満ちるは笑い声

乙女は林檎にキスをする

それから日傘を手放して  
思い切り大地を蹴るのです

空へとブランコ飛び出して  
青いドレスは空に溶け  
心は弾けて虹になる

虹は天使の滑り台  
天使が笑うと風が吹き  
恋の種が飛んでゆく

そのうち一つが乙女の胸に  
落ちて来たならどしよう

乙女はそっとつまみ出し  
知らない顔をするのです

乙女は夢で恋をする  
昼間の恋はいりません

今宵の夢はどうしよう  
遠い異国の空の下  
金の王子に手を取られ  
銀の魔法で空を飛ぶ

白い日傘に  
青い服  
赤い靴で軽やかに

タタタンタララン  
タラランラン

朝来た道を帰り行く



## 好きという言葉

好きという言葉は、とても便利。

耳に柔らかい言葉。

愛という言葉は、言うことにも言われることにも、時々、

途方に暮れてしまっけれど。

その意味を考えると、

難しすぎて、

奈落の底を覗き込んでいる気分になる。

好きという言葉は、もっと単純だから。

空が好き。

花びらの上の朝露が好き。

雨上がりの空気が好き。

スカートの裾を、ふわり、翻すのが好き。

せせらぎに、足を浸した時の冷たさが好き。

夕方、セピアに染まる部屋でぼんやりするのが好き。

紅茶の葉が開くのを待つ、ゆったりした時間が好き。

あなたの名前が好き。

あなたの心を潰さない様に、

わたしの心を痛めない様に、

ただ、

優しい春風のように、

好きだと言おう。

手を伸ばせば届く距離で、

手を繋がずに、  
並んで歩くの。

たまに寂しいと思うかも知れないけれど、  
この距離なら、  
ずっと一緒にいられるから。

いつかあなたが私以外の誰かを愛して、  
いつか私があなた以外の誰かを愛して、  
逢うことが絶えても、  
ずっと好きでいられるから。

## 好きという言葉（後書き）

以前にアップしていた”愛という言葉”を練り直した詩が出来たので、差し替えました。

## 永遠でも足りない

君を手に入れたと思った次の瞬間には、  
掴んだ筈のこの手には何も無い。

君の心に触れたと思った次の瞬間には、  
その手応えが幻の様に消えてしまう。

君に一つ近付いたと思った次の瞬間には、  
新たに知った君の側面に立ち竦み、  
近付いた筈の君が遠ざかる。

きつと。

永遠に僕は本当の君に辿り着けないんだろう。  
刻々と姿を変える雲の様に、  
君も一時も止まる事無く変わっていくから。

だから、きつと。

僕は君を求め続けるんだろう。  
それは哀しいけれど、  
それは寂しいけれど、  
とても幸福な事だと思う。

君を求めて、焦がれて、夢中になっていたら、  
きつと永遠もあつと言う間だ。

そして君は、  
永遠に僕を失うことがない。

不思議だね。

人間なんてこんなにちっぽけな存在なのに、  
全部知り尽くそうとしたら、  
永遠でも足りないよ。

もし神様に会う事があったなら。

愛を誓うには永遠でも足りないと、  
文句を言ってやろう。

そして二人で笑ってやるんだ。  
永遠なんて、大した事ないって。

## 結婚する私の大切なあなたへ

この広い世界で二人巡り会えた事を、奇跡と人はよく言う。幸福の絶頂にいる二人は世界で一番幸せであるがゆえに、それを奇跡と感じるだろう。

けれども、人間が一生に出会える人数などたかが知れている。人間一人の世界は、本当はとても狭い。

それでも尚、その縁そのものが奇跡だというのなら、私たちはなんと多くの奇跡に取り巻かれていることが。

ああ、どうか。

数多の奇跡の一つに引き合わされた、その手をどうか離さずに。

誓いの言葉にあるように、苦しい時も、楽しい時も、決してその手を離さずに。

いつか死が二人を分かつ時まで、決してその手を離さずに。その奇跡を、一生かけて証明して欲しい。

巡り会えた事が奇跡なら、奇跡の継続は愛と呼ばれるだろう。

ありきたりの幸せに宿る奇跡を、色褪せない愛が鮮やかに彩るだろう。

たとえ死が二人を分とうとも、あなたが忘れない限り奇跡は続くだろう。

そして、最期の時に奇跡の成就をあなたは知るので。

だから私は思いを込めて、祈ろう。

私の大切なあなたと、あなたの選んだ人が、きつとそこへ辿り着けるように。

そして心からの言葉を贈ろう。

結婚、おめでとう。

## 結婚する私の大切なあなたへ（後書き）

男性不信気味なところのあった妹が、来年春結婚します。  
私は妹を溺愛しているので、とんでもなく寂しいですが、幸せにな  
って欲しいです。



## 歩み

彼は、”美”には何か欠けていると知っていたので、  
優しくびっこを引いていた。

彼の歩みはゆっくりだ。

しかし、決して遅いのではない。

彼は歩むとは何かを、良く知っているだけだ。

彼は一歩進むごとに、囁きかける世界の言葉を受け取る。  
彼の明るい眼は、

人々が瞳に映しているながら気付けないものを、愛おしむ。

崩れかけたコンクリート塀にしがみつく小さな花や、

流れる早さの違う雲が語る空の深さや、

燃え尽きた星の命の名残を、愛おしむ。

彼の寄り道は、まるで遠い日の忘れ物のよう。

柔らかに積もる落ち葉の林で、

ドングリを拾ってお守りにし、

虫食いの枯葉を本に挟む。

少し遠回りをして通る草深い脇道で、

忘れ去られたようなお地蔵様に挨拶する。

そして、まるで大切な秘密のように、

恥ずかしそうに笑うのだ。

今日も彼は、あの独特のゆったりしたリズムで歩く。

一歩、一歩、呼吸に合わせて大事に進む。  
美しい世界を引き連れて。

## 歩み（後書き）

びっこは差別用語ですが、私は全くネガティブなイメージを持っていません。

言葉の響きが優しくて、どうしても使いたかったので使用しました。不愉快に思われる方がいらっしやいましたら、お詫び致します。

## おりっちゃん

祖母がまだ、少女だったころ。

上の学校に行くのは、農家の娘には難しいことだった。

子供の名前や、孫の名前を忘れても、

決して忘れない名前がある。

おりっちゃん。

おりっちゃんは学校の先生の娘で、祖母と仲良しだった。

初等科を出て上に進んだ女の子は、同級生ではおりっちゃんだけだった。

祖母は語る。

紺の袴に二本の白線。

女学校の制服。

その袴を翻して自転車に乗るおりっちゃんを、畑仕事をしながら毎朝眺めた。

真っ黒に日焼けした顔が普通の中で、おりっちゃんだけは白くて綺麗な顔をしていた。

初等科の頃は、おりっちゃんにだって勉強は負けなかった。

学校が休みの日に、遊びに行った。

教科書を読んでくれたけれど、ほとんど理解できなかった。

難しそうなその教科書を読ませて欲しかったけれど、言い出せなかった。

おりっちゃんの白い指が、教科書をめくるさまが、眩しかった。

土が皮膚の内側まで入り込んだような、汚れた自分の手では触れら

れないと思つた。

農家の娘に勉強はいらねえ。

父の目を盗んで本を読んで叱られていたけれど、その日を境に読書をやめた。

遠い目をして、繰り返し繰り返し祖母は語る。

白線は二本。

一本じゃなくて、二本。

一本は裁縫学校の袴だから。

祖母は歌う様に語る。

春は山のふもと、緑に萌え、

おりっちゃんが朗読してくれた教科書の一節。

そこだけを、覚えている。

春は山のふもと、緑に萌え、

その続きを、祖母は知らない。

ただ、夢見るような遠い目をして歌う様に繰り返す。

紺の袴に白線二本。

自転車に乗って、袴の裾を翻すおりっちゃん。

決して、上の学校に行きたかったとは言わず、ただ繰り返す。

眩しそうな顔をして。

紺の袴に白線二本。

自転車に乗って、袴の裾を翻すおりっちゃん。

毎朝、畑で泥にまみれながら見送ったおりっちゃん。  
おりっちゃんに、逢いたいなあ。

そのまま祖母はうつうつと、夢と現の狭間に目を閉じる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4875n/>

---

奇跡の果てにあるものは

2011年10月7日15時47分発行